

棚田を照らす

5月下旬、棚田には水が張られ、植えられたばかりのやわらかな苗が風に揺れています。太陽の光で刻一刻と変化する景色が見られる、美しい季節を迎えました。

しかし、少し目を凝らすと見えてくる耕作放棄地も。労力は2倍、収量は半分といわれるように、大型農耕機が入れず手間がかかる棚田。農家の高齢化の問題も加わり、時代の流れとともに少なくなっているのが現状です。

今回はフォトリポートとして、天神小学校の田植え体験と、町内の棚田の田植え風景を追いました。非日常と日常を映した棚田から、どんな姿が見えてくるでしょうか――





Interview

上岡 満榮さん 北浦



子どもたちの笑顔を見るのが毎年の楽しみ。ひ孫が4年生なので、3年ぶりの開催は一段とうれしかったです。今年は上手な子がいて、きれいに植えていました。田舎でも田んぼをする家は減っているんで、やり慣れた子を見るとやっぱりうれしいですね。

終わる頃にはみんな上手になって田植えを楽しんでいました。かわいらしい笑顔にはいつも元気をもらいます。コロナの状況が落ち着いたら、秋には収穫した米で餅つきをしたいと思います。

ひ孫が「一番おいしい」と言ってくれる自慢の棚田米を、みんなにも食べてほしいですね。

田植えって楽しい！

泉谷の棚田に子どもたちの声がこだました日

天神小学校4年生の「田植え体験」が5月25日、泉谷の棚田で行われました。3年ぶりの再開となった今年は、25人の児童が上岡満榮さんに教わりながら手植えに挑戦。泥だらけになっても、「田植えが楽しかった」と笑います。青空が広がる棚田には、児童たちの楽しそうな声が響いていました。





「配ノ京」の棚田

7_ 崎本さんによると平家の落ち人伝説が伝わるという配ノ京。その静かで美しいたたずまいに日本の原風景を感じます 8,9_ 小さな機械しか入らない上、土が柔らかい田んぼ。作業をすると体が膝くらいまで沈んでしまうため、かなりの重労働になる。小回りが大変で作業効率も悪いとのこと 10_ 田植えが終わった田んぼには苗がきれいに並んでいた

少し頑張ろうと思います。

棚田を維持するのは本当に難しいです。娘はよく手伝ってくれてうれしいけれど、大変だから継がすことはできません。自分の代までかなと思っていきます。やれる限りはしたいけれど、膝が悪くなったのでそんなに長くはできないかも——。

私が小学生の頃から手伝っていたこの田んぼ。当時、近所のばあちゃん、くわ1本で土を耕し、足でならしていました。今みたいな道もなかったの、みんな難儀して米を作っていました。私もしんどい思い出の方が多いけれど、やっぱり配ノ京はええところ。今年も田植えを終えた田んぼを見て、ようやくと、ほっとしています。どこよりもおいしい米ができるから、それを楽しみにしてもう少し頑張ろうと思います。

Interview



崎本 久孝さん = 水元 =

里山の暮らしが伝える日本の原風景

その棚田の美しさは——

人と自然が共生する棚田。人の汗なしにはつくれない美しい風景です。先人たちの智慧や思いも詰まっています。変わりゆく時代の中で、変わらずに続いている営み——。夏の始まりを知らせる田植えの情景に、あなたはどんなことを思いますか。「やれる限りはやりたい」と汗を拭く、崎本久孝さんに話を伺いました。



各地域の棚田。初夏の景

1_ 泉谷の棚田。山側に向かって左側の斜面には、きれいな石積みが何段も重なる 2_ くわ1つで畔を作る男性(本川地区) 3_ 山の斜面にいくつもの棚田が点在する重松地区 4_ 手押し式の田植え機の作業風景。細長くいびつな形の棚田は、等間隔に苗を植えるのにも工夫が必要 5_ 機械で植えられなかったところは、手植えをする 6_ 今ではあまり見られなくなった「おさんばいさん」。田植え前、田の中央部のあぜ道に南天の枝などを立ててお供えし、豊作を祈願する